

「正信念仏偈」データベースとeラーニングの構築～その2 越前4派の旋律収集と楽譜化

深 見 友紀子
黒 田 義 道
遠 山 和 大
赤 羽 美 希

1. はじめに

浄土真宗（真宗）¹⁾において、最も日常的に用いられている勤行に「正信念仏偈」（以下、通称の「正信偈」を用いる）が挙げられる。この偈は親鸞（1173-1263）の作で、その代表的な著書である『教行信証』の「行文類」にある。「正信偈」を読誦する際には、いわゆる「棒読み」ではなく、旋律がつけられる場合が多い。この旋律は各派で定められており、偈文は同一であっても、実際に読誦される場面での聴覚的イメージは、派によって大きく異なる。

各派の「正信偈」の旋律に差異があること自体は広く知られているようであるが、一般的には、例えば本願寺派・大谷派のように多くの門徒を持つ宗派間の差異についての認識にとどまると思われる。その他の派では、一般的に入手できる資料中に「正信偈」の旋律が示された例は皆無であろう。また、「正信偈」のテキストに関する研究は数多く行われているが²⁾、各派の旋律を比較する研究は、筆者らの知る限りにおいてこれまで行われておらず、ましてや「正信偈」の旋律のデータベースは存在しない。

こうした状況を鑑み、筆者らは昨年度から「正信念仏偈データベース」の作成に取り組んできた。具体的には次の作業を行っている。^{3,4)}

- 1) 各派における「正信偈」の旋律を収録する。
- 2) 収録した旋律を主に西洋音楽で一般的に使われている五線譜上に採譜

する。

- 3) 各派「正信偈」の楽譜・音声、および解説等をデータベース化して web 上に公開する。

以上を通じて得られた結果から、各派の旋律の差異を明確にできる。さらにこのデータベースは e ラーニングの教材として、「正信偈」に関心を持つ人々が活用できるようになる。

昨年度（2013年度）は、真宗10派のうち、本願寺派・大谷派・佛光寺派・興正派・木辺派の5派の本山において調査を行い、その結果をもとに、各派「正信偈」の楽譜化および web データベース化を行った。

2. 越前4派の「正信偈」に関する調査

本年度（2014年度）は「越前4派（四箇本山）」と呼ばれる、三門徒派（本山専照寺）・出雲路派（本山毫撰寺）・誠照寺派（本山誠照寺）・山元派（本山證誠寺）の4派の本山を訪ね、各派「正信偈」についての調査を行った。その結果、明らかになったことを以下に記す。

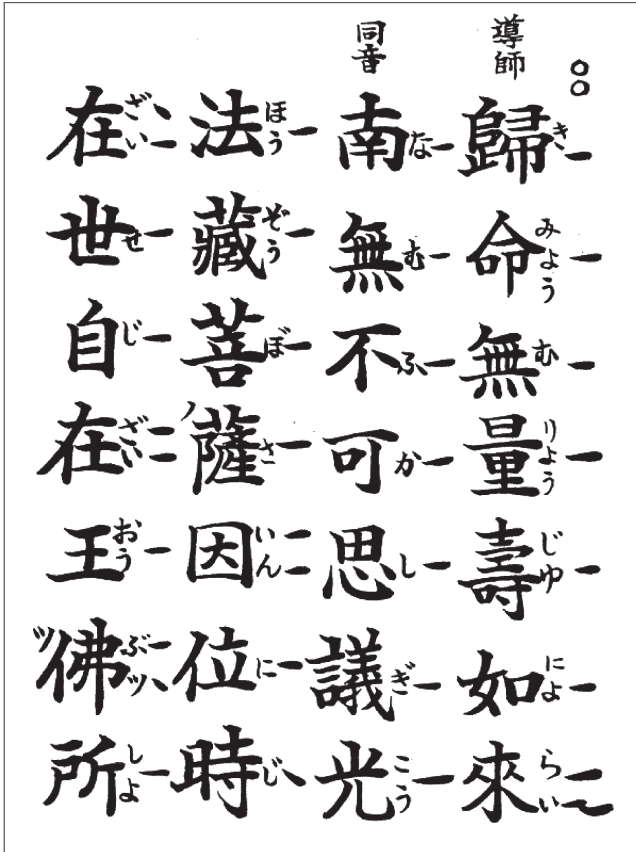
2.1. 三門徒派

明治以前、三門徒派の「正信偈」には独自の旋律が定められていたが、それらは現代まで伝承されていない。今日では大谷派に類する旋律が用いられている。

三門徒派で用いられる「正信偈」の旋律は次の8種類で、これらは大谷派で用いられる9種類の旋律のうち、「句洵」を除いたものと同じ名称である。これらのうち、日常的に用いられている旋律は「草四句目下」である（資料1）。

- a) 真四句目下
- b) 行四句目下
- c) 草四句目下
- d) 中拍子

- e) 句切
- f) 舌々
- g) 中読
- h) 真読



資料1 三門徒派「草四句目下」の冒頭部分⁵⁾

三門徒派では、声明の旋律を伝承するにあたり、基本的には口伝によるのみ伝授されるべきものであるという考え方が根強く、経本には便宜的に博士が記入されているものの、それ以外の注釈を書き込むことは行われてこなかった。このため、口伝が繰り返される中で、旋律の微妙な違いが生まれていったようである。また、調声の際の音高は、勤行を行う場所の広さや参詣者の年齢・性別などの状況を加味して、調声人の判断によって決定される。こうした事情から、同じ旋律であっても人によってリズムや音程に差異があり、本山などで僧侶・門徒が一同に会して勤行を行う際にばらつきが生じる結果となった。

現在では在家用の CD⁶⁾を作成し、可能な限り統一的な勤行を行えるよう努めている。但し、この CD の音高は在家用門徒が発声しやすい音高で制作されたものであり、例えば本山の御影堂で読誦される際の音高よりは低く調声されている。

2. 2. 出雲路派

出雲路派では、『常用勤行集』(1994年)⁷⁾に収録された「正信偈」の旋律(資料2)が日常的に用いられている。この旋律は出雲路派が独自に制定したもので、「常用勤行の正信偈」と呼ばれている。

現在の『常用勤行集』が制定される以前は、古来より出雲路派に伝わる旋律が用いられていた。この旋律は、1960年に「日常勤行」として定められた。しかし、この旋律がどのように発生し、現代まで伝承され、「日常勤行」に定められるに至ったかという歴史的経緯は現在のところ定かではない。

出雲路派の寺院は主に福井県内に分布しているが、地域によって「日常勤行」の旋律には大きなばらつきがあった。このため、本山などに各地の僧侶が一堂に会した際などには一緒に勤行を営むのが困難なほどであった。しかし、勤行においては参加者による読誦が揃っていることが望ましいため、1994年に本山で用いられていた旋律を基本として、地域ごとの差異を加味しながら『常用勤行集』の経本および CD⁸⁾を作成した。現在では、これを基準として「正

信偈」の旋律を統一すべく、普及を図っている。但し、地域によっては「常用勤行の正信偈」が普及せず、「真四句目下」を中心とした大谷派に類する旋律が多く用いられている場合もある。

「常用勤行の正信偈」以外では、本山における報恩講などの重要な法要の際に「真四句目下」が用いられ、また「舌々」も稀に用いられている。したがって、現在の出雲路派で用いられている「正信偈」の旋律は、以下の3種類である。

- a) 常用勤行の正信偈
- b) 真四句目下
- c) 舌々

		同音	○ 朝声
在 <small>ざい</small>	法 <small>ほう</small>	南 <small>な</small>	歸 <small>き</small>
世 <small>せ</small>	藏 <small>そう</small>	無 <small>む</small>	命 <small>み</small>
自 <small>じ</small>	菩 <small>ぼ</small>	不 <small>ふ</small>	無 <small>む</small>
在 <small>ざい</small>	薩 <small>さ</small>	可 <small>か</small>	量 <small>り</small>
王 <small>おう</small>	因 <small>いん</small>	思 <small>し</small>	壽 <small>じゆ</small>
佛 <small>ぶつ</small>	位 <small>に</small>	議 <small>ぎ</small>	如 <small>に</small>
所 <small>しょ</small>	時 <small>じ</small>	光 <small>こう</small>	來 <small>らい</small>

資料2 出雲路派「常用勤行の正信偈」の冒頭部分⁷⁾

他の真宗各派においても、江戸時代以前から伝わってきた「正信偈」の旋律が明治時代以降に整理・統合されたという例が見られる⁹⁾。しかし、真宗教団連合によって1973年に定められた「和訳正信偈」¹⁰⁾を除くと、出雲路派のように、ごく近年になってから新たに「正信偈」の旋律を制定したという例は、真宗各派の中にあってはユニークな取り組みであるといえよう。

2. 3. 誠照寺派

誠照寺派で用いられている「正信偈」の旋律は次の3種類である。

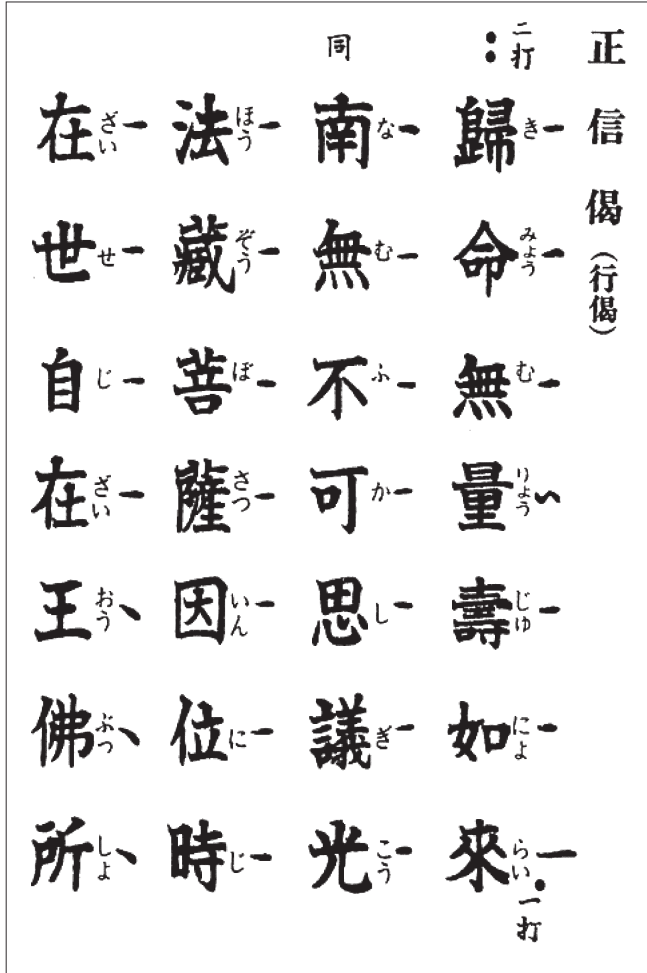
- a) 草偈
- b) 行偈
- c) 真偈

門徒の間で勤行に用いられるのは「草偈」と「行偈」である。「草偈」の旋律はほとんど音高の変化がないが、日常的に最も多く用いられ、門徒向けのCD¹¹⁾も制作されている。門徒によって「行偈」が用いられるのは通夜や報恩講の際で、門徒向けの勤行集¹²⁾に収録されている「正信偈」には、「行偈」の博士が記入されている(資料3)。「真偈」は報恩講の際の僧侶による勤行にのみ用いられる。「行偈」と「真偈」に関してはCDなど一般的に入手可能な音源は存在しないが、今回の調査では「行偈」を録音したカセットテープの複製をいただくことができた。

宗派として定めた「正信偈」の読誦法は存在するが、実際の勤行で調声を行う際の音高は調声人(その多くは僧侶)の裁量に任されており、本山においては、法主の調声が基準になっている。また、節回しの細部も調声人や地域による若干の差異があり、本山などにおいて大勢で勤行を行う時にはばらつきが生じることもある。

越前4派のうち、誠照寺派以外の3派は大谷派の影響を大きく受けており、「正信偈」の旋律も大谷派と類するもの、あるいは同一のものが用いられる例が見られる。しかし誠照寺派は大谷派の影響が小さく、「正信偈」の旋律もほ

ほ独自のものであるといえよう。誠照寺派で用いられる3種類の旋律がいつ定められたのかは定かではないが、15代法主である秀誠上人（1642-1691）の時代であると伝えられている。



資料3 誠照寺派「行偈」の冒頭部分¹²⁾

2. 4. 山元派

山元派では、大谷派の旋律による「正信偈」が用いられている。ただし、口伝が繰り返される過程で旋律が徐々に変化し、実際には大谷派の勤行との間に微妙な差異が生じているとのことである。日常的に用いられている旋律は「草四句目下」である（資料4）。

本研究では、昨年度に収集した大谷派の「正信偈」の旋律をもって山元派の「正信偈」と見なすこととし、山元派の旋律を改めて収集することは行わなかった。山元派からもその点についての諒解をいただいている。

		(唱和)	(導唱)	正 信 念 仏 偈
在 <small>ざい</small>	法 <small>ほう</small>	南 <small>な</small>	帰 <small>き</small>	
世 <small>せ</small>	蔵 <small>ぞう</small>	無 <small>む</small>	命 <small>みょう</small>	
自 <small>じ</small>	菩 <small>ぼ</small>	不 <small>ふ</small>	無 <small>む</small>	
在 <small>ざい</small>	薩 <small>さ</small>	可 <small>か</small>	量 <small>りょう</small>	
王 <small>おう</small>	因 <small>いん</small>	思 <small>し</small>	寿 <small>じゅ</small>	
ツ <small>ぶつ</small>	位 <small>に</small>	議 <small>ぎ</small>	如 <small>にょ</small>	
所 <small>しょ</small>	時 <small>じ</small>	光 <small>こう</small>	来 <small>らい</small>	

資料4 山元派「草四句目下」の冒頭部分¹³⁾

3. 各派「正信偈」の採譜とデータベースへの編入

本研究で調査を行った越前4派のうち、山元派を除く3派について、各本山より入手したCD音源をもとに五線譜への採譜を行った。採譜を行ったのは、筆者の一人である赤羽である。

採譜の対象として選んだ旋律は、各派で日常的に最も多く用いられている旋律であり、三門徒派は「草四句目下」、出雲路派は「常用勤行の正信偈」、誠照寺派は「草偈」である。なお、誠照寺派については、「行偈」の採譜も予定しており、調査の際にいただいたカセットテープに録音された音源を電子ファイルに変換する作業が完了した後、採譜の作業を開始する予定である。

採譜にあたっては、昨年度に採譜を行った5派と同様に、収集された音源を可能な限り忠実に五線譜上に記譜するように心がけた。また、eラーニング教材としての活用を念頭に置き、必ずしも楽譜に慣れていない方にも容易に読譜できるよう配慮し、複雑な記譜法を避けた。

「正信偈」の旋律は、口伝によって長く伝承されてきた。このため、「正信偈」の旋律を楽譜で表現することは、「正信偈」がより多くの人たちに親しまれるきっかけとなることが期待される反面、それまで口承されてきた旋律のニュアンスを単純化してしまう危惧もある。そこで、本研究では、単に「正信偈」を楽譜化して簡単に唱えることができるようにするだけでなく、「お経」の旋律としてのニュアンスも伝わる楽譜となるように努力した。こうした観点から、作成した楽譜の校閲を各派の宗務部長および声明に関して詳しい知見を持つ僧侶の方々にもお願いした。

以上のプロセスを経て得られた楽譜の冒頭部分を資料5～7に示す。

こうして得られた楽譜と音声は、昨年度より制作しているwebコンテンツである「正信念仏偈データベース」に追加され、インターネット上で公開される予定である。

現在のところ、このwebコンテンツは一般には公開されていないが、京都

女子大学宗教文化研究所の web サイトにおいて公開されることが決まっており、その際には本学など浄土真宗系学校の学生や、家庭で勤行の練習を行う一般門徒、浄土真宗各派の僧侶など、「正信偈」に関心を持つ人たちが「正信偈 e ラーニング教材」として活用することが可能となる。

なお、本願寺派・大谷派で用いられる「正信偈」の旋律は、これまでも市販された CD 等を通して、多くの人たちに知られてきた。しかし、本研究が対象とした越前 4 派の「正信偈」については、その宗派の僧侶や門徒以外にはほとんど知られてこなかったとみられ、少なくともインターネットをはじめとする一般的に入手しやすい資料の中に、これらの宗派の「正信偈」に関する情報は皆無であるとみられる。それだけに、本研究によって収集することができた音源や、そこから制作した楽譜は、きわめて貴重な資料となったといえる。

♩ = ca.40 (♩ = ♩ = ♩)

鐘

Solo accel. -- ♩ = ca.70

Tutti accel. -----

きみょうむりょうじゆにょらいーなむふかしぎこう

ほうぞうぼさいんにじざいせじざいおうぶつしよ

♩ = ca.115-120

とけんしよぶじょうどいんこくどにんでんしぜんまく

こんりゅうむじょうしゅうがんちょうほつけうだいくぜい

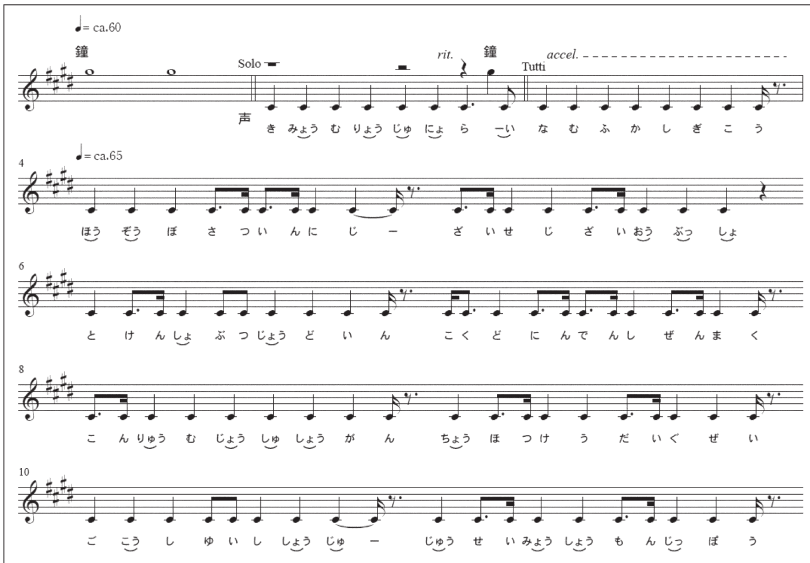
ここうしゆいししゅうじゆじゅうせいみょうしゅうもんじつぼう

資料 5 三門徒派「正信偈」(草四句目下) 楽譜の冒頭部分



♩ = ca.50 (♩ = ♩³)
 鐘 ca.2sec ca.3sec. Solo accel. --- ♩ = 130
 1 き みょう む りょう じゆ にょ ら い
 3 ♩ = 85 accel. ----- ♩ = 98 Tutti
 3 な む ふ か し ぎ こ う ほ う ぞ う ほ さ い ん に じ ゃ い せ じ ぎ い お う ぶ つ し ゃ
 6 と け ん し ゃ ぶ つ じ ゃ ど い ん こ く ど に ん で ん し ぜ ん ま く
 8 こ ん り ゅ う む じ ゃ う し ゃ し ゃ が ー ん ち ゃ う ほ つ け う だ い く せ い
 10 こ こ う し ゅ い し し ゃ う じゆ じゆ せ い み ゃ う し ゃ う も ん じ つ ほ う

資料6 出雲路派「正信偈」（常用勤行の正信偈）楽譜の冒頭部分



♩ = ca.60 鐘
 Solo rit. 鐘 Tutti accel. -----
 1 声 き みょう む りょう じゆ にょ ら い な む ふ か し ぎ こ う
 4 ♩ = ca.65
 4 ほ う ぞ う ほ さ つ い ん に じ ゃ い せ じ ぎ い お う ぶ つ し ゃ
 6 と け ん し ゃ ぶ つ じ ゃ ど い ん こ く ど に ん で ん し ぜ ん ま く
 8 こ ん り ゅ う む じ ゃ う し ゃ し ゃ が ん ち ゃ う ほ つ け う だ い く せ い
 10 こ こ う し ゅ い し し ゃ う じゆ じゆ せ い み ゃ う し ゃ う も ん じ つ ほ う

資料7 誠照寺派「正信偈」（草偈）楽譜の冒頭部分

4. まとめ

浄土真宗各派で用いられている「正信偈」の音源を収集して楽譜化し、インターネット上にweb教材として公開することを目的として、昨年度から本研究を行ってきた。本年度は、越前4派と呼ばれる三門徒派・出雲路派・誠照寺派・山元派について現地調査を行い、これまでほぼ各派に所属する僧侶や門徒の間でのみ知られてきた、「正信偈」の旋律が明らかとなった。

三門徒派・出雲路派・誠照寺派の3派については、日常的に多く用いられている「正信偈」の旋律を収集することができた。また、それらの旋律を、現在、西洋音楽で一般的に用いられている五線譜に書き記すことで、「正信偈」の学習を行う上で容易に親しめる参考資料を作成することができた。

各派の担当者へのインタビューからは、「正信偈」などの声明伝承に関する問題点についても伺うことができた。各派ともに基準となる旋律は定められてはいるものの、地域や個々の僧侶によって旋律の差異が発生してしまい、CDの頒布等を通して可能な限り統一化しようという努力がなされているという現状が浮き彫りとなった。また、出雲路派のように、これまで伝承されてきた旋律に基づく新たな旋律を作成し、門徒や僧侶の間で普及させようというユニークな試みがなされているという例も見られた。

こうして得られた音声および楽譜は、多くの人が閲覧できるようwebコンテンツとして公開する予定であり、浄土真宗系学校における宗教教育や、一般門徒の勤行の練習におけるeラーニング教材として、さらに他派「正信偈」の旋律に関心を持つ浄土真宗の僧侶の方々の参考資料などとして活用されることが期待される。そして、各派「正信偈」の伝承という面においても一定の役割を持つならば望外の喜びである。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、各派本山の皆様には、インタビューおよび資料の収集にご協力をいただいた。特に、真宗三門徒派宗務長・黒田昌英師、真宗出雲路派宗務長・泰圓澄法嗣師、真宗誠照寺派宗務長・茨田隆信師および同派本正寺住職・稲田典昭師には、各派「正信偈」についての詳細な解説および楽譜化に関するアドバイスをいただいた。また、京都女子大学元教授の野村伸夫氏には、「正信偈」に関する資料をお示しいただいた。ここに記して深く感謝の意を表す。

注

- 1) 浄土真宗（真宗）系の仏教教派は多岐にわたるが、本稿では、真宗教団連合に所属する「真宗10派」について取り上げる。真宗10派とその本山は以下の通りである。
 - a) 浄土真宗本願寺派、本願寺（西本願寺；京都市）
 - b) 真宗大谷派、真宗本廟（東本願寺；京都市）
 - c) 真宗高田派、専修寺（津市）
 - d) 真宗佛光寺派、佛光寺（京都市）
 - e) 真宗興正派、興正寺（京都市）
 - f) 真宗木辺派、錦織寺（野洲市）
 - g) 真宗出雲路派、毫撰寺（越前市）
 - h) 真宗誠照寺派、誠照寺（鯖江市）
 - i) 真宗三門徒派、専照寺（福井市）
 - j) 真宗山元派、證誠寺（鯖江市）
- 2) 「正信偈」の研究に関する文献は膨大な数にのぼるが、例えば以下のようなものが挙げられる。
 - a) 村上速水（1985）正信念仏偈讃述、永田文昌堂、209pp.
 - b) 重見一行（1981）教行信証の研究：その成立過程の文献的考察、法蔵館、480pp.
 - c) 福永静哉（1991）浄土真宗伝承唱読音概説—その歴史と現状、永田文昌堂、387pp.
- 3) 深見友紀子・遠山和大・赤羽美希（2015）「正信念仏偈」データベースとeラーニングの構築：その1 五線譜化へのプロセス、京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要、28、43-61.

- 4) 遠山和大・深見友紀子・赤羽美希 (2014) 浄土真宗各派「正信偈」のeラーニング教材、岡山大学教育研究紀要、10、135-150.
- 5) 真宗三門徒派式務部監修 (2008) 真宗三門徒派在家勤行集、永田文昌堂、200pp.
- 6) 真宗三門徒派宗務所式務部監修・読誦 (発行年不明) 真宗三門徒派門徒勤行集 CD、真宗三門徒派宗務所式務部。
- 7) 真宗出雲路派勤行集編纂委員会編 (2013) 真宗出雲路派常用勤行集、真宗出雲路派宗務所、143pp.
- 8) 真宗出雲路派宗務所 (発行年不明) 常用勤行 CD、真宗出雲路派宗務所。
- 9) 播磨照浩 (1976) 真宗各派声明の分類、印度學佛教學研究、Vol. 25, No. 1. 136-137.
- 10) 真宗教団連合編 (2004) 和訳正信偈、法蔵館、137pp.
- 11) 本山誠照寺法式委員会 (2011) 親鸞聖人750回御遠忌記念 真宗誠照寺派勤行 CD、誠照寺。
- 12) 真宗誠照寺派宗務所 (2013) 真宗誠照寺派勤行聖典、真宗誠照寺派宗務所、164pp.
- 13) 真宗山元派 (2013) 同朋勤行集、真宗山元派宗務所護法会、123pp.

<キーワード>

浄土真宗 仏教声明 正信偈 eラーニング 五線譜